

濃度基準値設定候補物質に係る測定法について

安全衛生総合研究所に設置された濃度基準値設定候補物質の測定法選定WGにおける測定法の評価内容を踏まえ、測定法を選定・提案する。その基準は次のとおりである。

- a. 提案する方法は、測定に関与する者が作業環境に応じて必要な検証を実施して使用するのを前提とする。
- b. 測定方法を評価する際に検討する項目として
 - ① 測定範囲が現在の OEL の 1/10 から 2 倍の範囲をカバーすること
 - ② OEL の 1/10 の濃度で捕集剤からの脱着率や添加回収率が 75%より良好であること
 - ③ 捕集試料の冷蔵時の保存安定性が 90%を超えること、または溶液試料としてその値を確保できることが推測されること
 - ④ OEL の 2 倍の濃度で破過なく測定できる条件があること

以上の項目のうち、3～4項目について定量的なデータのある方法は、原則として採用する。

- c. 定量的なデータが不足していても、同様の測定法を用いる他の物質において測定法の検証がされている場合又は測定法の検証実験が行われている場合には、コメントを付して採用する。
- d. 従来、作業環境測定において使用されることが少ない、前処理に誘導体化を用いる方法、クロマトグラフによる分離法と金属分析を組み合わせる方法も、コメントを付して測定法として採用する。
- e. 従来、作業環境測定においてガスクロマトグラフ法の検出器として使用されている、電子捕獲型検出器(ECD)や炎光光度計(FPD)は採用する。質量分析計に置き換える際は、測定者が各自の作業環境に適合する方法を検証する。質量分析計による分析事例があれば参考文献として記載する。
- f. 常温で気体であるような物質で特に測定法が示されていない場合、不活性プラスチックバッグによる捕集方法やキャニスターによる捕集方法、また、連続測定が可能なセンサーを利用する方法であっても、コメント付きで採用する。
- g. 常温で気体と液体、気体と固体、使用法を考慮してミストと混合ばく露するような物質については、相補型捕集や IFV サンプラーを使用することになるが、IFV については検証法が確立していないため、少なくとも相補型で捕集するコメント付きで提案する。
- h. 試料の保存安定性は、実験が実施されていないことが多いが、他の項目の検証がなされている場合には、なるべく早く分析する等のコメント付きで採用する。なお、安定な粒子状物質については保存安定性の評価がなされていなくても許容する。

以上